

目次

第16講	助詞(1)	62
第15講	長文問題演習(3)	第11講～第14講	58
第14講	助動詞総合	54
第13講	助動詞(7)	50
第12講	助動詞(6)	46
第11講	助動詞(5)	42
第10講	長文問題演習(2)	第6講～第9講	38
第9講	助動詞(4)	34
第8講	助動詞(3)	30
第7講	助動詞(2)	26
第6講	助動詞(1)	22
第5講	長文問題演習(1)	第1講～第4講	18
第4講	形容詞・形容動詞・係り結び	14
第3講	動詞(2)	10
第2講	動詞(1)	6
第1講	古文とは	2
第17講	助詞(2)	66
第18講	副詞の呼応	70
第19講	長文問題演習(4)	第16講～第18講	74
第20講	紛らわしい語の識別(1)	78
第21講	紛らわしい語の識別(2)	82
第22講	長文問題演習(5)	第20講・第21講	86
第23講	敬語(1)	90
第24講	敬語(2)	94
第25講	敬語(3)	98
第26講	敬語総合	102
第27講	和歌の修辞	106
第28講	長文問題演習(6)	第23講～第27講	110
第29講	古典文法総合(1)	114
第30講	古典文法総合(2)	118
入試問題演習①～③	122
付録―文語文法要覧	134

第11講 助動詞 (5)

基本事項

1 〈推定〉の助動詞「なり」

【活用】 ラ変型

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
なり	○	なり	なり	なる	なれ	○

【接続】 終止形接続 (ラ変型活用語には連体形)

【意味】 a 〈伝聞〉「〜ソウダ・〜トイウ」

b 〈推定〉「〜ヨウダ」

「なり」は、「鳴あり」あるいは「音あり」が変化してできた語といわれており、〈聴覚〉を元にして推定するのが原義の助動詞である。ひとまとめに「伝聞・推定の助動詞」とされることが多いが、厳密には、その推定の根拠である情報が、「人の話」であるときは〈伝聞〉、「単なる音声」であるときは〈推定〉のように文法的意味は区別される。

2 〈推定・婉曲〉の助動詞「めり」

【活用】 ラ変型

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
めり	○	(めり)	めり	める	めれ	○

【接続】 終止形接続 (ラ変型活用語には連体形)

【意味】 a 〈推定〉「〜ヨウダ」

b 〈婉曲〉「〜ヨウダ」

「めり」は、「見あり」あるいは「見えあり」が変化してできた語といわれており、「なり」とは対照的に〈視覚〉を元にして推定するのが原義の助動

詞である。また、「らし」との対比で言うと、「らし」が根拠のある推定であるのに対し、「めり」は主観的な推定であるといえる。

「婉曲」は、事実を断定的に述べるのを避け、表現をやわらげる用法である。

3 「なり」「めり」「べし」と撥音便

「なり」(伝聞・推定)・「めり」・「べし」の三つの助動詞が、「ある」などのラ変型活用語に接続すると、その「る」が撥音便化して「ん」と発音されることがある。しかし、平安時代初期までは「ん」は表記されることがほとんどなかったもので、「撥音便無表記」という現象が起きることになる(平安時代中期以降は「ん」も表記されるようになる)。

(例) 「あるめり」↓「あんめり」↓「あめり」

4 〈断定〉の助動詞「なり」「たり」

【活用】 「なり」 || 形容動詞型 (ナリ活用)、「たり」 || 形容動詞型 (タリ活用)

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
なり	なら	なり	なり	なる	なれ	(なり)
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	(たれ)

【接続】 「なり」 || 体言接続、活用語の連体形

「たり」 || 体言接続

【意味】 a 〈断定〉「〜デアル」

b 〈存在〉「〜ニアル・〜ニイル」(「なり」のみの用法)

「なり」は「にあり」が、「たり」は「とあり」がつづまってできた語といわれている。よって、「に・あり」「と・あり」のように元の形に分裂した形で使われることも多い(連用形「に・と」の用法)。

1 ()内の助動詞を、適切な形に活用させよ。

- (1) 萱草くわんさうといふ草こそ、忘れ草とて、それを見る人、思ひをば忘る(なり)。
- (2) 此一門このにあらざらむ人は、皆人非人みなにんびにん(なり)べし。
- (3) 風のみこそ人に心はつく(めり)。
- (4) 冬(なり)ど、帷子かたびらをなむ着たりける。

2 次の文中から、助動詞「なり」「たり」「断定」をそのまま単語の形で抜き出し、ここでの活用形を答えよ。

- (1) 男もすなる日記にきといふものを、女もしてみむ、とて、するなり。
- (2) 来るをことすれば、さななりと人々いでて見るに、
- (3) 上にさかふること、豈人臣あにじんしんの礼たらんや。
- (4) 月の宮古の人にて父母あり。

3 傍線部を、音便を使わない形で書き改めよ。

- (1) 海賊は夜歩よあしきせざなり。
- (2) 「誰も見たことがないというその骨は」さては扇あふぎにはあらで、海月くらげのななり

1



- (1) 『今昔物語集』
- (2) 『平家物語』
- (3) 『徒然草』
- (4) 『宇治拾遺物語』



- (3) 心こころ情緒を解する気持ち。

2



- (1) 『土佐日記』
- (2) 『枕草子』
- (3) 『平家物語』
- (4) 『竹取物語』



- (3) 豈あたくんや
いか どうして〜ことがあるうか。
いや いや、ない。

3



- (1) 『土佐日記』
- (2) 『枕草子』



- (2) さてはいか それならば。それでは。

1 傍線部の助動詞の終止形、ここでの活用形、および文法的意味を答えよ。なお文法的意味は、次のア

イから選び。記号で答えよ。(重複使用可)

ア 断定 イ 存在 ウ 伝聞 エ 推定 オ 婉曲

(1) 人々あまた声して来なり。国守の御子の太郎君のおはするなりけり。

A B

(2) あまの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも

(3) かくてまたあけぬれば、天禄三年といふめり。

(4) 「まことにや、この虎の人食ふを、やすく射んとは申すなる」

A B

(5) 笛をいとをかしく吹きすまして、(荻の葉の家の前を) 過ぎぬなり。

(6) また聞けば、侍従の大納言の御女亡くなり給ひぬなり。

2 傍線部を現代語訳せよ。

(1) 「この野は、盗人あなり」

(2) この十五日になん、月の都より、かぐや姫のむかへにまうで来なる。

(3) 人はみな春に心をよせつめり我のみや見む秋の夜の月

(4) 「これは龍のしわざにこそありけれ」

1

出典

(1) 『宇治拾遺物語』 (2) 『古今和歌集』

(3) 『蜻蛉日記』 (4) 『宇治拾遺物語』

(5) 『更級日記』 (6) 『更級日記』

重要古語

(1) あまた 〓 たくさん

(3) かくて 〓 このように

(5) いと 〓 とても

(6) をかし 〓 趣がある

2

出典

(1) 『伊勢物語』

(3) 『更級日記』

(2) 『竹取物語』

(4) 『竹取物語』

重要古語

(2) まうづ 〓 参る

演習問題 B

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

七月十五日の月に出でて、せちに物思へる気色なり^①。近く使はるる人々、竹取の翁^{おきな}に告げていはく、「かぐや姫の、例も月をあはれがり給へども、このごろとなりては、ただことにも待らざめり^②。いみじくおぼし嘆く事あるべし。よくよく見たてまつらせ給へ」と言ふを聞きて、かぐや姫に言ふやう、「なんでう心地すれば、かく物を思ひたるさまにて、月を見たまふぞ。うましき世に」と言ふ。かぐや姫、「見れば^③、世間心ほそくあはれに侍る。なでう、物をか嘆き待べき」と言ふ。

かぐや姫のある所に至りて見れば、なを物思へる気色なり。これを見て、「あが仏、何事思ひたまふぞ。おぼすらんこと、何事ぞ」と言へば、「思ふこともなし。物なむ心ほそくおぼゆる」と言へば、翁、「月な見給そ。これを見給へば、物おぼす気色はあるぞ」と言へば、「いかで、月を見ではあらん」とて、猶^{なほ}、月出づれば、出でゐつつ嘆き思へり。夕やみには、物思はぬ気色也。月の程に成ぬれば、猶、時々はうち嘆きなどす。これを、使ふものども、「なほ、物おぼす事あるべし」とささやけど、親をはじめて、何ごととも知らず。

〔竹取物語〕

(注) ○あが仏 〓 私の大切な方。 ○夕やみ 〓 月の出の遅い頃の、月の出ていない夕方。

問一 傍線部①・④の助動詞の文法的意味を答えよ。

① _____
④ _____

問二 傍線部②「ざめり」を、音便を使わない形に書き改めよ。

問三 傍線部③「聞きて」の主体は誰か。本文中の言葉で答えよ。

問四 傍線部⑤「見れば」とあるが、何を「見る」のか。本文中の言葉で答えよ。

問五 傍線部⑥を現代語訳せよ。

重要古語

せちに 〓 ひどく。
例も 〓 いつも。
いみじく 〓 ひどく。
なんでう 〓 どんな。
うまし 〓 何の不足もない。
な〜そ 〓 してはいけない。
猶 〓 やはり。
いかで 〓 どうして。
おぼす 〓 お思いになる。